

Ⅱ. 分担研究報告書

2. サテライト化およびユニット型が家族の訪問に与える影響に関する研究

サテライト化およびユニット型が家族の訪問に与える影響に関する研究

主任研究者 井上 由起子（国立保健医療科学院施設科学部施設環境評価室長）

研究要旨

本研究では、1章で取り上げた事例の中から2施設を取り上げ、本体施設とサテライト施設を比較することにより、まちなか居住および個室・ユニット型という立地特性と空間構成の違いが家族の訪問頻度や滞在時の過ごし方に与える効果についての検証を行った。

得られた結論は以下の通りである。

①訪問頻度の変化

本体施設よりもサテライト施設の方が家族の訪問回数が多くなる。家族の自宅と施設の距離が近くなることにより、数ヶ月に1回、月に1回という訪問回数の少ない家族の頻度が増加することを明らかにした。

②交通手段の変化

本体では、自動車やバスなどが全体の98%と97%を占めているが、サテライトでは徒歩の割合が増加する。徒歩以外にもタクシーの利用が増加しており、高齢な訪問者にとって徒歩や気軽にタクシーを利用できる距離にあることが重要であると考えられる。

③滞在時の過ごし方

個室・ユニット型となることにより個室での過ごし方には大きな変化が見られた。サテライトの個室には、いすやソファが持ち込まれ訪問時の環境がセッティングされていた。個室になることにより室内での家族の行為が多様になり、個室は入居者の居場所としてだけでなく、家族が入居者に介護を行う場所、自らが休息する場所、宿泊する場所として使用されていた。

研究協力者

山口健太郎：国立保健医療科学院

A. 研究目的

特別養護老人ホームのサテライト化は、①住み慣れた地域での居住継続、②まちなか居住による地域資源の活用、③外部からアクセスしやすい開かれた施設を目的として進められている。地域に出て行く、迎え入れるという双方向の効果が期待できるが、認知症や身体的なマヒによって一人での外出が困難な施設入居者に

とって、外部からの訪問、特に家族の訪問は精神的なケアの面において重要な役割を担う。また、多床室大規模型から個室・ユニット型という空間の変化が、訪問者の過ごし方を大きく変えるという側面もある。

本章では、1章で取り上げた事例の中から2施設を取り上げ、本体施設とサテライト施設を比較することにより、まちなか居住および個室・ユニット型という立地特性と空間構成の違いが家族の訪問頻度や滞在時の過ごし方に与える効果について検証することを目的とする。

B. 研究方法

調査対象としたのは、長野県上田市にあるA施設と、新潟県長岡市にあるB施設である。A施設は、本体とサテライトが共に同じ地区の山間部にあり、地域特性に違いはないが施設空間に違いがある事例である。B施設は、本体がまち中から離れた市街化調整区域にあるのに対して、サテライトは長岡駅から徒歩15分の市街化区域にあり、地域特性、施設空間の双方が異なる事例である。

調査は、面会票調査、アンケート調査、ヒアリング調査からなる。全て入居している人を対象としており、ショートステイ利用者は調査対象外とした。

(倫理面への配慮)

調査対象施設ならびに、インタビューを実施する利用者および家族に対して、研究の趣旨を説明したうえで、個人情報に連結不可能な匿名化処理をすること、入手した情報は研究班内に限るものとし研究の目的以外に使用しないことなどを明記した覚書を取り交わした。

C. 研究結果および考察

①訪問頻度の変化

面会票調査をもとに作成した一人の入居者に対する30日あたりの訪問回数から、本体の訪問回数は30日あたり平均2.5回(A施設)および3.1回(B施設)であるのに対して、サテライトでは9.2回(A施設)および6.5回(B施設)となり、いずれもサテライトの方が訪問頻度が高かった。アンケート調査から転居前後の変化を比較すると、自宅との距離が近くなることにより、数ヶ月に1回、月に1回という訪問回数の少ない家族の頻度が増加していることを明らかにした。

②交通手段の変化

本体では、自動車やバスなどが全体の98%と97%を占めていたが、サテライトでは徒歩の割合が増加することを明らかにした。徒歩以外の変化としては、タクシーの利用割合の増加があった。本体まで利用すると高額になるが、サテライトまでの距離なら許容できる金額になるからであると考えられる。施設に入居している高齢者にとって配偶者や友人の訪問は重要な精

神的なケアとなる。いずれも訪問者自体が高齢であると想定されるため徒歩や気軽にタクシーを利用できる距離にあることが重要であると考えられる。

③周辺地域の認知度

サテライトのある地域が入居者にとってなじみのある地域であるか否かについて家族に質問したところ、なじみがあると答えたのは7名中3名であった。住んでいた場所と距離的には近いものの集落が違うとなじみがないという事例も見られた。本研究で対象とした中山間地域や地方都市の場合、「住み慣れた地域」とは施設を中心とした同心円状の距離よりも、小学校区や集落など地域活動の単位として成立している範囲の方が重要であると考えられる。

④滞在時の過ごし方

A施設の場合、本体では30分未満の人が42.3%となり1時間未満の人は全体の79.4%となる。それに対して、サテライトでは1時間以上3時間未満の人が47.1%となり、3時間以上の人も13.8%となる。個室・ユニット型に移ることにより家族の滞在時間が増加しているといえる。一方、B施設場合、本体では30分未満の人が38.9%であるのに対して、1時間以上3時間未満の人が30.8%を占め、3時間以上の人も13.8%いる。サテライトでは30分未満の人が49.0%と最も多く、1時間未満の人の合計は85.1%となる。A施設では、サテライトの滞在時間の方が長くなっていたが、B施設ではサテライトの方が短いという結果となった。その理由として、B施設では交通事情が悪く家族の迎えが来るまで待っているなどの行為が影響していると考えられる。

個室内の過ごし方には、大きな変化が見れた。本体では、いすなど滞在するときに使う道具が持ち込まれておらず長時間過ごす環境は整えられていなかった。サテライトの個室には、いすやソファが持ち込まれ訪問時の環境がセッティングされていた。個室内での家族の行為をまとめると1)排泄介助などプライベートな介助を行いやすくなる。2)自らが休憩するなど入居者だけでなく家族の居場所となる。3)ひ孫、孫など多様な家族の訪問が見られるようになる。4)家族の宿泊がみられるようになる。などがあげられる。

共用空間における家族の過ごし方としては、キッチンや食堂を利用している人が3事例あったものの、全く使用していない家族が4事例あった。共用空間を使用していない家族からは、本体施設の喫茶コーナーのような場所が欲しいという要望が聞かれた。

本体施設では、大規模・複合化させることで喫茶コーナーや公園などの多様な空間を作り出していたが、小規模なサテライトは居住機能のみ限定されることが多い。それ以外の要素は地域の資源に依存することとなり、施設の立地特性が重要な役割を担う。本調査で対象としたサテライトの周辺にも幾つかの資源が存在していたが、家族がそれを十分に使いこなせていない側面が見受けられた。家族にとっても本体施設のように訪問者用としてセットされた環境を使うのではなく、地域の人々が使っているものを使いこなす意識が必要であると考えられる。

D. 結論

・サテライト化および個室・ユニット型によって家族の訪問頻度は増加する。

・施設と家族の自宅との距離が近くなることにより、徒歩、タクシーでの移動が可能となる。

・個室になることにより、室内での家族の行為が多様となる。個室は、入居者の居場所としてだけでなく、家族が入居者に介護を行う場所、自らが休息する場所、宿泊する場所となることを明らかにした。

E. 研究発表

特記すべきものなし

F. 知的財産権の取得状況

特記すべきものなし

2. サテライト化およびユニット型が家族の訪問に与える影響に関する研究

2-1. 研究目的

特別養護老人ホームのサテライト化は、①住み慣れた地域での居住継続、②まちなか居住による地域資源の活用、③外部からアクセスしやすい開かれて施設を目的として進められている。地域に出て行く、迎え入れるという双方向の効果が期待できるが、認知症や身体的なマヒによって一人での外出が困難な施設入居者にとって、外部からの訪問、特に家族の訪問は精神的なケアの面において重要な役割を担う。また、多床室から個室という空間の変化が、訪問者の過ごし方を大きく変えるという側面もある。

本章では、1章で取り上げた事例の中から2施設を取り上げ、本体施設とサテライト施設を比較することにより、まちなか居住および個室・ユニット型という空間構成が家族の訪問頻度や滞在時の過ごし方に与える効果について検証することを目的とする。

2-2. 調査概要

①調査対象施設の概要

調査対象としたのは、長野県上田市にあるA施設と、新潟県長岡市にあるB施設である。

A施設は、本体とサテライトが共に同じ地区の山間部にある。地域性に変化はないが施設空間に違いがある事例である。

B施設は、本体がまちなかから離れた市街化調整区域にあるのに対して、サテライトは長岡駅から徒歩15分の市街化区域にある。地域性、施設空間の双方が異なる事例である。

②調査方法

調査方法は、面会票調査、アンケート調査、ヒアリング調査からなる。全て入居している人を対象としており、ショートステイ利用者は調査対象外とした(図表2-1)。

a) 面会票調査

面会票調査は本体とサテライトの双方で実施した。調査員が作成した面会票を施設の玄関に設置し、家族に記入してもらう方法をとった。調査項目は、日時、氏名、連絡先、訪問時間、予定滞在時間、入居者との関係、施設までの交通手段、入居者との外出予定の有無の計9項目である。

A施設のサテライトでは、面会票を記入しないご家族が多いことから、面会票調査に加えて業務日誌の閲覧を行った。業務日誌からは、日時、氏名、入居者との関係のみを抽出している。なお、各項目の記入数は、それぞれ異なるためサンプル数も異なっている。

A施設の調査期間は本体、サテライトともに2007年7月1日から2007年12月31日までの184日間(6ヶ月間)。B施設の調査期間は、本体施設が2007年8月11日から2007年12月31日までの143日間、サテライトが2007年7月4日から2007年12月31日までの181日間である。

調査から得られた面会票の枚数(日誌閲覧の結果を含む)は、A施設の本体が431枚、サテライトが349枚、B施設の本体が892枚、サテライトが247枚となっている。複数人の訪問が合った場合には1カウントとしている。面会票に記入があった入居者数は、A施設の本体が41名、サテライトが9名、B施設の本体が73名、サテライトが18名である。調査開始時に入居していた人の中で一度も面会票の記入がなかった人はA施設の本体で10名、サテライトで1名、B施設の本体で20名、サテライトで1名となっている。

b) アンケート調査

アンケート調査はサテライト入居者の家族にのみ実施した。アンケートの送付先は、連絡先となっている家族ではなく最も訪問頻度の高い家族とした。家族の選定は施設側に依頼している。アンケート項目は、図表2-1の通りである。

アンケートの回収率は、A施設が100% (9/9)、B施設が73.3% (11/15) となっている。A施設では、アンケート送付日直前に退去した1家族に対しても送付しており、回収数は定員数より1名多い9通となっている。

c) ヒアリング調査

ヒアリング調査はアンケート調査の中からの許可を得た家族に対して行った。対象者数は、A施設

図表2-1 調査概要

		A施設		B施設	
		本体	サテライト	本体	サテライト
定員	入所	42名	8名	85名	15名
	ショートステイ	20名	4名	77名	3名
所在地		長野県上田市		新潟県長岡市	
立地条件	都市計画区分	無指定	無指定	市街化調整区域	市街化区域
	期間	2007/7/1~ 2007/12/31	2007/7/1~ 2007/12/31	2007/8/11~ 2007/12/31	2007/7/4~ 2007/12/31
面会票数	面会票数	431	349	892	247
	記入者数	41名	9名	73名	18名
	調査中の退所	6名	2名	11名	4名
	調査中の入所	8名	2名	8名	4名
	未記入者数※1	10名	1名	20名	1名
アンケート調査	アンケート項目	施設までの交通手段、訪問頻度、滞在時間、施設での宿泊の有無、利用者との過ごす場所、居室内での過ごし方、居室以外で過ごし方・場所、本体からサテライトへ移ったことによる変化とその理由、顔と名前を覚えている職員の数			
	回収数	/		9	11
	回収率			100%	73.30%
ヒアリング調査	/			2名	5名
			夫・妻 0名	夫・妻 2名	
			子 2名	子 3名	

※1未記入者:調査時点で入居していた人の中で、一度も面会票の記入がなかった人。

図表2-2 アンケート調査対象者の概要

	NO	本体	サテライト	続柄	ヒアリング対象者		NO	本体	サテライト	続柄	ヒアリング対象者
A施設	A01	同一町内	同一町内	妹		B施設	B01	同一市内	同一市内	次男	○
	A02	同一町内	同一町内	子			B02	同一市内	同一市内	長女	
	A03	同一町内	同一町内	次女	○		B03	同一市内	同一市内	妻	○
	A04	同一町内	同一町内	義妹			B04	同一市内	同一市内	夫	○
	A05	同一町内	同一町内	弟			B05	同一県内	同一県内	子	
	A06	同一市内	同一市内	夫			B06	同一市内	同一市内	次男	
	A07	同一県内	同一県内	嫁			B07	他府県	他府県	長男	○
	A08	同一市内	同一市内	弟			B08	同一市内	同一市内	長女	○
	A09	他府県	他府県	娘	○		B09	同一市内	同一市内	義弟	
					B10		他府県	他府県	長男		
					B11		同一市内	同一市内	次男		

が2名、B施設が5名となっている。入居者との関係は、妻・夫が2名（いずれもB施設）、子が5名である。調査は入居者の居室内で、本体およびサテライトの図面を提示しながら、訪問時の過ごし方、滞在場所、訪問頻度に違い、施設の職員との関わりの違い、その他について聞き取る手法をとった。過ごし方については、調査員が図面の中に家具や家族の居場所を記入し確認を取るかたちで行い、家族の了承を得て居室の写真撮影も行った。なお、A施設の1名はすでに入居者が退去していたため、施設の居間にて入居時の内容について聞き取りを行い、B施設の1名は遠方であったため家族の所在地（東京都）でヒアリングを行った。

2-3. 訪問頻度の違いに関する考察

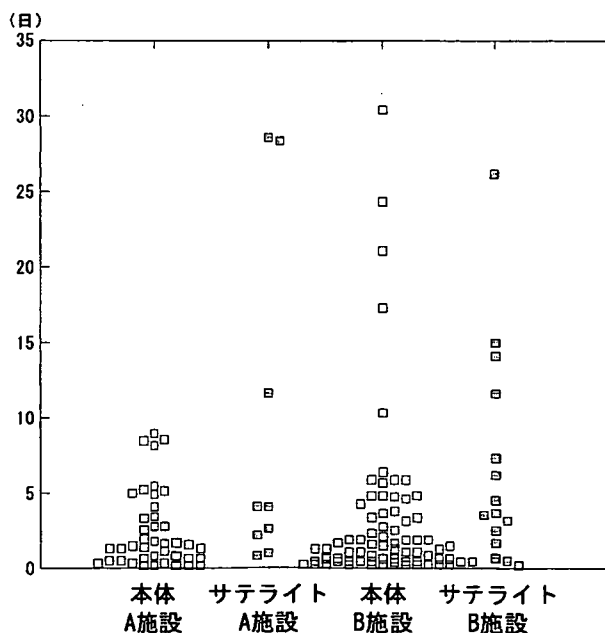
図表2-3は、面会票調査をもとに作成した入居者1人に対する30日あたりの訪問回数である。

各施設の平均値で見るとA施設のサテライトは30日あたり9.2回、本体は2.5回、B施設のサテライトは6.5回、本体は3.1回となっており、いずれも本体よりサテライトの方が平均訪問回数が多い。

30日間の訪問回数が1以下の人数をみるとA施設のサテライトは2名、B施設のサテライトは4名となるのに対して、A施設の本体は15名、B施設の本体は29名となり、本体の方が訪問回数の極めて少ない人が多い。一方、訪問回数が多い人を見るとA施設の本体では10回以上の人が一人もおらず3日に1回以上の訪問を行っている人がいない。それがA施設のサテライトでは10回以上の人が3名、B施設のサテライトでは4名、B施設の本体では5名となる。B施設の本体はサテライトに比べて定員数が5.6倍あることを考慮すると、距離が近くなる、個室になるなどの変化により、毎日もしくは2、3日に1回という頻繁な訪問が可能になっていると考えられる。

図表2-4、図表2-5、図表2-6は、訪問頻度についてアンケートやヒアリングから質的な部分について表したものである。図表2-4の施設と自宅の距離については、インターネット上に公開されているルート検索から測定した (<http://www.mapfan.com/routemap/routeset.cgi>)。ルート検索に際しては全て町名以上の精度で行っている。

図表2-3 入居者1人に対する30日あたりの訪問回数



A 施設の本体に入居していた時の自宅と施設の距離は、2.8 kmの人が4名、5 km前後の人が2名、10 km以上の人が3名となり、いずれも施設近郊に居住している人が多い。サテライトに転居した後の施設と自宅の距離は数100m以内の人が4名となり、1名を除き全て本体の時よりも自宅と施設の距離が近くなっている。その結果、数100mとなった4名の内3名の人の訪問頻度に増加が見られた。A 施設の本体とサテライトは同一町内に立地しているが、より近隣にあることが、月数回から週1回への増加や週2～3回から毎日への増加など頻繁な訪問につながったと考えられる。

B 施設の場合、本体に入居していた時の自宅と施設の距離は全員が9 km以上となり、自動車もしくは公共交通機関での移動が必要となる距離であった。サテライトへの転居後は2から3 kmの人が多くなり、家族の自宅と距離が近くなった。訪問頻度も数ヶ月に1回、月1回という回数の少ない人の訪問頻度が増加が見られ、「本体のときには家族に車で送ってもらっていたが、距離が近くなったのでやすくなった。」「来れる日は毎日来たい」という家族のコメントも得られている。

また、重度の入居者の家族からは「本人が来て欲しいとか、もっと居て欲しいといってくれれば、長く居るけど、何も返答がないので行く機会が少なくなってしまうている。会話が成立すれば週に1回は来ていると思う」というコメントが得られ、入居者の身体状況や会話の成立の有無が家族の関わりに影響を及ぼしているといえる。

図表 2 - 4 訪問頻度の変化

	施設との位置関係				訪問頻度		
	本体		サテライト		本体	サテライト	変化
A01	同一町内	2.8	同一町内	数100m	月数回	週1回	↑
A02	同一町内	2.8	同一町内	数100m	月1回	月数回	↑
A03	同一町内	2.8	同一町内	数100m	週2～3回	毎日	↑
A04	同一町内	2.8	同一町内	数100m	月1回	月1回	→
A05	同一町内	5	同一町内	6.8	—	月数回	↘
A06	同一市内	5.1	同一市内	3.8	—	毎日	↘
A07	同一県内	17.9	同一県内	11.6	週1回	月数回	↓
A08	同一市内	10.5	同一市内	9.2	—	数ヶ月1回	↘
A09	他府県	199.7	他府県	198.4	週1回	週1回	→
B01	同一市内	11.1	同一市内	4.1	月数回	月数回	→
B02	同一市内	9.5	同一市内	3.4	月1回	週2～3回	↑
B03	同一市内	12.6	同一市内	2.6	—	週2～3回	↘
B04	同一市内	9.7	同一市内	1.9	週2～3回	週2～3回	→
B05	同一市内	67.4	同一市内	62.4	月1回	月数回	↑
B06	同一市内	9.3	同一市内	2.7	月数回	月数回	→
B07	他府県	285.7	他府県	290.3	月1回	月1回	→
B08	同一市内	9.6	同一市内	3.5	数ヶ月1回	週2～3回	↑
B09	同一市内	10.6	同一市内	2	月数回	月数回	→
B10	他府県	299.6	他府県	304.2	年1回	年1回	→
B11	同一市内	10.7	同一市内	3.8	月1回	月1回	→

図表 2 - 5 訪問頻度に関するコメント

- 【A施設 A01】（娘 本体：同一町内 サテライト：同一町内）
（本体）毎週土曜日、日曜日にお昼の食事介助をかねて訪問していた。
（サテライト）毎日、お昼時間に食事介助をかねて訪問するようになった。本体では食堂で食事介助を行っていたが、サテライトに移ってからは部屋でゆっくりとテレビを見ながら介助するようになった。
- 【A施設 A09】（娘 本体：他府県 サテライト：他府県）
（サテライト）サテライトになってから毎週来るようにしている。月曜の晩に来て、その日は部屋で泊まって、次の日の昼に帰ることが多い。
- 【B施設 B01】（息子 本体：同一市内 サテライト：同一市内）
（本体）寝たきりで意思疎通が困難なので、一方的に話しかけるのみ。訪問頻度は1ヶ月に2回程度だった。4人兄弟で、長岡にいる姉が週に1回程度訪問している。2名の兄弟は遠方のため年に1回程度。
（サテライト）滞在時間や頻度は、本体にいるときとあまり変わらない。訪問頻度は1ヶ月に2回ぐらいで、訪問時間は10分から15分ぐらい。少しのびて20分ぐらいいるかも。本人が来て欲しいとか、もっと居て欲しいと言ってくれれば、長くいるけど、何も返答がないので、行く機会が少なくなってしまっている。会話が成立すれば週に1回は来ていると思う。花見や食事会などには積極的に参加するようにしている。
- 【B施設 B03】（妻 本体：同一市内 サテライト：同一市内）
（本体）本体には3日間しかいなかったが、毎日家族に車で送ってもらい通っていた。妻にしか介護を許さなかったのが全て介護していた。
（サテライト）施設に慣れてきたので4日に1回の割合で訪問している。訪問時間は14時から15時。コーヒーの時間に合わせてきている。コーヒーの時間に話し相手がいないと寂しがるから。距離が近くなったので来やすくはなった。
- 【B施設 B07】（息子 本体：他府県 サテライト：他府県）
（本体）一月に1回は訪問していた。イベントにもよく参加していた。
（サテライト）自宅から歩いていけるので、近くなってよかったと思う。近所の人や友人がよく遊びに来てくれる。友人の訪問頻度は圧倒的に増えた。年寄りにはあまり友達がいないから、訪問するのが楽しいようだ。遠方なので自分の訪問頻度は変わらない。一月に1回程度。イベントにはよく参加している。本体でもイベントに参加していたが、サテライトの方が近くなので便利だ。
- 【B施設 B08】（娘 本体：同一市内 サテライト：同一市内）
（本体）月に2回程度（長女）。その他に妹が通っていた（長岡市在住）。遠かったのでイベントにはあまり参加していない。
（本体）訪問頻度は増えた。週3回ぐらいは来ている。来れる日は毎日来たい。自分の家族が自立して1人になったら、入り浸っているかもしれない。

2-4. 交通手段に関する考察

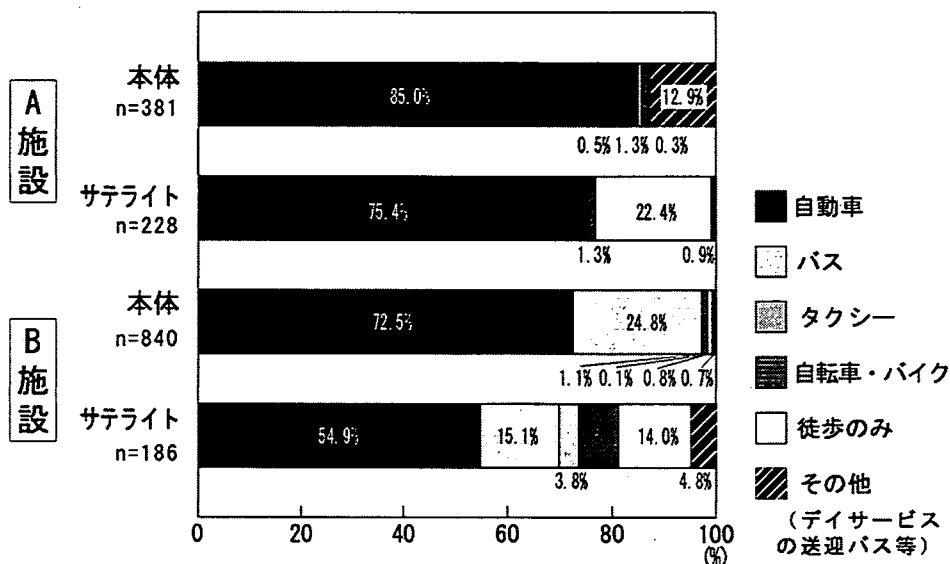
図表 2-6 は面会票をもとに作成した家族が利用している交通手段の割合であり、図表 2-7 はアンケート調査から得られた交通手段の変化である。図表 2-8 はヒアリングから得られた交通手段に関する家族のコメントである。

図表 2-6 から A 施設の本体では、デイサービスの送迎車で訪れる家族を加えると 98% が自動車となる。B 施設の本体でも、自動車とバスをあわせると 97% を占める。本体へのアクセスには自動車が不可欠となるが、双方の施設ともにバスなどの公共交通機関が不便な地域であるため、自動車が運転できない高齢者、特に配偶者にとっては本体施設へのアクセスは非常に困難であるといえる。ヒアリングの中からも「子供に送ってもらい、迎えに来てもらうまで待っている」というコメントも得ら

れている。

サテライトについてみるとA施設では、自動車が75.4%を占めるが徒歩の割合も22.4%ある。B施設でも自動車が54.9%、バスが15.1%となり徒歩の割合が14.0%ある。図表2-7のアンケート結果を見るとA施設の場合、本体からサテライトに移ることにより約2.8kmから数100mに変化した人の半数が徒歩となっている。B施設ではバス移動であった人が、2kmや3.4kmとなることにより徒歩での訪問を行っている。ヒアリングの中から「バスを2本乗り継いでいかないといけないので歩いている。」とい

図表2-6 各施設における交通手段の割合



図表2-7 交通手段の変化

	施設との位置関係				訪問頻度	
	本体		サテライト		本体	サテライト
A01	同一町内	2.8	同一町内	数100m	自動車	自動車
A02	同一町内	2.8	同一町内	数100m	自動車	徒歩
A03	同一町内	2.8	同一町内	数100m	自動車	徒歩
A04	同一町内	2.8	同一町内	数100m	自動車	自動車
A05	同一町内	5	同一町内	6.8	—	自動車
A06	同一市内	5.1	同一市内	3.8	—	自転車・バイク
A07	同一県内	17.9	同一県内	11.6	自動車	自動車
A08	同一市内	10.5	同一市内	9.2	—	自動車
A09	他府県	199.7	他府県	198.4	電車・車	電車・車
B01	同一市内	11.1	同一市内	4.1	自動車	自動車
B02	同一市内	9.5	同一市内	3.4	バス	徒歩・自転車
B03	同一市内	12.6	同一市内	2.6	自動車	徒歩・自動車
B04	同一市内	9.7	同一市内	1.9	自動車	自動車
B05	同一市内	67.4	同一市内	62.4	自動車	自動車
B06	同一市内	9.3	同一市内	2.7	自動車	自動車
B07	他府県	285.7	他府県	290.3	バス	バス
B08	同一市内	9.6	同一市内	3.5	自動車	自動車
B09	同一市内	10.6	同一市内	2	バス	徒歩
B10	他府県	299.6	他府県	304.2	自動車	自動車
B11	同一市内	10.7	同一市内	3.8	自動車	自動車

うコメントもあり、交通事情の悪い地域ではなんとか徒歩で歩ける距離にあることが重要であるといえる。また、本調査対象施設では、自動車が日常的な交通手段となっている地域であることから、徒歩や自転車への変化が少なかったが、自動車への依存度が低い都市部では、本調査以上の変化が起こると考えられる。

徒歩以外の変化としてB施設ではタクシーの割合が3.8%となっている。ヒアリングから「今は車を利用しているが、車に乗れなくなっても自転車、徒歩、いざとなればタクシーで通うこともできる。」というコメントも得られており、近距離となることによりタクシーの利用に対する抵抗感も少なくなると考えられる。

施設に入居している高齢者にとって配偶者や友人の訪問は重要な精神的なケアとなるが、いずれも訪問者自体が高齢であると想定されるため徒歩や気軽にタクシーを利用できる距離にあることが重要であると考えられる。

図表2-8 交通手段に関するコメント

【A施設 A03】(娘 本体：同一町内 サテライト：同一町内)

- ・日常的には車を利用していましたが、犬を連れてくるときは歩いて来ていた。

【A施設 A09】(娘 本体：多府県 サテライト：多府県)

- ・本体でもサテライトでも駅からは車を利用しているので、近くなったメリットは少ない。以前は車で東京から来ていたが、事故の心配があるので、今は新幹線で上田まで来ている。上田駅の隣駅に車を置いているので、駅からは車を利用している。本体にいたときに、バスを利用したこともあったが、バス停から本体までが遠かったので、重たい荷物(食材)をもって歩くのが大変だった。

【B施設 B01】(息子 本体：同一市内 サテライト：同一市内)

- ・本体までは車で30分ぐらいかかった。サテライトへは車で10分ぐらい。距離として3キロ程度だろう。
- ・サテライトに移ってからは近くなったので、少しの用事でも直ぐによれるようになった。しかし、格段、便利になったという実感はない。

【B施設 B03】(妻 本体：同一市内 サテライト：同一市内)

- ・本体では、バスを2本乗り継いでいかないといけないので、息子に車で送り迎えをしてもらっていた。
- ・サテライトに行くにもバスを乗り継いでいかないといけないので40分かけて歩いている。雪が降るときは息子に送り迎えを頼んでいる。

【B施設 B04】(夫 本体：同一市内 サテライト：同一市内)

- ・自宅からはサテライトまでは歩いて12分から13分。今(調査時)は、車を利用しているが、車に乗れなくなっても自転車、徒歩、いざとなればタクシーでも通うことができる。近くなので時間を見つけては、何時でもよることができるのがいい。

【B施設 B08】(娘 本体：同一市内 サテライト：同一市内)

- ・本体までは車で20分から30分かかかる。大きな川を越えるのに時間がかかる。
- ・サテライトまでは車で10分以内。近くなったので来やすくなった。しかし、移動は車がメインになっている。

2-5. 周辺地域の認知度に関する考察

サテライトの目的の一つとして、入居者が従前に住んでいた地域に戻るという側面がある。図表2-9はサテライトのある地域が入居者にとってどの程度なじみのある地域であるかを家族にヒアリングしたものである。

サテライトのある地域になんらかのなじみがあると答えた人は7名中3名であった。住んでいた地域に近く友人や親戚が多くおり友人の頻繁な訪問が見られる事例や、住んでいた地域と同じ小学校区で家族全員がその地域をよく知っている事例、昔仕事でよく通っていた事例などが該当する。その一方で、距離的には近いが土地に馴染みはなかったなど、2、3 km程度の距離だが集落や校区が違うとあまりなじみの関係性がみられない事例もあった。

本研究で対象とした中山間地域や地方都市の場合、「住み慣れた地域」とは施設を中心とした同心円状の距離よりも、小学校区や集落など地域活動の単位として成立している範囲の方が重要であると考えられる。また、今回の事例ではあまり行われていなかったが、施設から地域に出て行くという行為を想定すると、なじみの理髪店、商店などを地域の設定は異なるものになると考えられる。

図表2-9 周辺地域の認知度に関するコメント

【A施設 A03】(娘 本体：同一町内 サテライト：同一町内)

・距離的には近いが、部落が違うのでサテライトの土地に馴染みはなかった。知り合いもいなかった。

【A施設 A09】(娘 本体：多府県 サテライト：多府県)

・母(利用者)が住んでいたのは上田市吉田で、サテライトからは車で15分程度のところだった。踊りの先生(母)をやっていたので、大畑(サテライト)のあたりにも踊りを教えにきていた。母にとっては馴染みがある場所だった。

本体のあたりはスキーのときに菅平へ行く途中で通る程度であった。

【B施設 B01】(息子 本体：同一市内 サテライト：同一市内)

・サテライトのある土地に馴染みはない。サテライトの奥に悠久山公園があり、花見のときの通り道として知っている程度だった。

【B施設 B03】(妻 本体：同一市内 サテライト：同一市内)

・サテライトがある美沢地区にはあまり馴染みがない。

【B施設 B04】(夫 本体：同一市内 サテライト：同一市内)

・サテライトの近くには親戚や知人が多くいる。知人や親戚が多く来てくれるので移ってきてよかった。また、知人を誘うこともできる。

奥の悠久山公園に昔からよく通っていたので、よく周辺も知っている。

【B施設 B07】(息子 本体：多府県 サテライト：他府県)

・住んでいた場所と同じ小学校区だったので、家族全員がよく知っている。私(入居者の息子)は近くの高校にかよっていた。

【B施設 B08】(娘 本体：同一市内 サテライト：同一市内)

・この地域に対して馴染みはあまりない。母(入居者)は柏崎の人で、娘が2人長岡にいたので、移ってきた。周りに母の知人はいない。

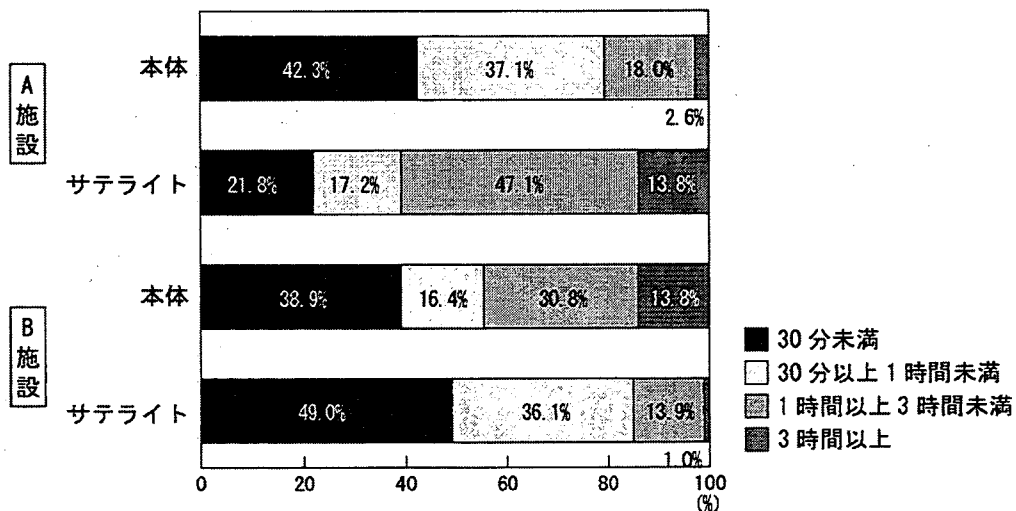
2-6. 滞在時の過ごし方に関する考察

前節において施設と自宅との距離が近くなることによって訪問頻度が増えることを明らかにした。本節においては、訪問時の過ごし方に着目し分析を行う。図表2-10は、面会票調査をもとにした1回あたりの訪問予定時間である。予定としたのは、面会票を記入してもらったのが訪問開始時に多いことからである。

A施設の場合、本体では30分未満の人が42.3%となり、1時間未満の人は全体の79.4%となる。それに対してサテライトでは、1時間以上3時間未満の人がもっとも多く47.1%となり、3時間以上の人も13.8%となる。

B施設場合、本体では30分未満の人が一番多く38.9%を占めるが、ついで多いのは1時間以上3時間未満の人であり30.8%となる。3時間以上の人も13.8%と多く、B施設では本体においても長時間の滞在が見られる。サテライトでは30分未満の人がもっとも多く49.0%となり、1時間未満の人の合計は85.1%となる。B施設ではA施設とは逆にサテライトの方が短時間の滞在になると人が多くなるという結果となった。前節の交通手段の項において、B施設では「交通事情が悪いので子供が迎えに来

図表2-10 1回あたりの訪問予定時間



図表2-11 滞在時間の変化

	A施設		B施設	
	本体	サテライト	本体	サテライト
A01	15分以上30分未満	15分以上30分未満	B01	15分以上30分未満
A02	15分以上30分未満	30分以上60分未満	B02	15分未満
A03	30分以上60分未満	1時間以上3時間未満	B03	1時間以上3時間未満
A04	30分以上60分未満	30分以上60分未満	B04	15分以上30分未満
A05		15分以上30分未満	B05	15分以上30分未満
A06		1時間以上30分未満	B06	15分以上30分未満
A07	30分以上60分未満	15分以上30分未満	B07	15分以上30分未満
A08		30分以上60分未満	B08	15分未満
A09	1時間以上3時間未満	3時間以上(宿泊)	B09	15分未満
			B10	15分以上30分未満
			B11	15分以上30分未満

てくれるまで待っている」などのコメントが得られおり、3時間以上の長時間の滞在は、これら交通事情の影響もあると考えられる。

この滞在時間をアンケートから個々の家族の変化でみたのが図表2-6となる。A施設の場合、滞在時間が増加したのは9名中2名であり、一人は60分未満から3時間未満に増加し、もう一人は個室になることによって日帰りから宿泊に変化した。それに対してB施設では、11名中8名の人の滞在時間が増加した。B施設の場合、本体では15分未満の人が3名、30分未満の人が7名といずれも短時間での滞在となっているが、サテライトでは60分未満の人が5名、3時間未満の人が5名となり、ほとんどの人の滞在時間が長時間となっている。15分未満の滞在では、たっただま声をかける。少し顔を見て帰るなど、浅い関わりとなってしまいが30分以上となるといすなどに座りゆっくりと話すことができるようになると考えられる。

そこで、図表2-12から図表2-19に本体施設とサテライト施設での各家族の過ごし方について詳細に記述する。

①居室での過ごし方

本体の居室は、A施設の1名が2床室となっているが、その他の6名はいずれも4床室である。居室に家具を持ち込んでいる事例はなく、ベッド、施設側が用意した収納があるのみである。いすなど座る家具は、持ち込まれておらず施設にいすを借りて座るという事例が多く、立ったまま声を掛けるという事例もあった。同室者がいるということに関して、「多床室だと同室者が気になり食事介助や自らの食事も行いづらかった。」というコメントが多く、同室者に対する気遣いから入居者とゆっくりと関わる事が出来なかったと指摘されている。気遣い以外にも排泄介助のニオイが気になり、食事などを食べる気にならなかったなど同室者の影響が家族の行為に影響を及ぼすことも明らかとなった。

サテライトの居室では、家具が持ち込まれている事例が多く、いす、ソファなどゆっくりと滞在できる座具が用意されていた。「孫の世話で疲れたのでおばあちゃんの部屋で休んでいた」「帰る前に一休みしてから帰ることもあった」など、ソファなどは入居者が使う道具としてではなく、家族がそこでゆっくりと過ごすために設置されていることが多かった。机を持ち込んで自分の仕事をしている家族もあり、居室は入居者の空間としてではなく、家族の居場所としての機能も果たしていた。

個室の中では、多床室では行いにくいケアも行われていた。排泄介助や好きな歌を一緒に歌うなど他者に影響を及ぼす行為や、裁縫、筆記など介護職員の手が行き届かない行為をゆっくりと行うことが出来ていた。家族がゆっくりと入居者に関わる行為により、入居者自身のストレスも緩和し、逆に家族への依存度が減少した事例も見れた。

訪問の仕方としては、孫、ひ孫など様々な家族が訪問しやすくなったという事例が多かった。多床室には小さい子供を連れて行くことに気兼ねしていたが、個室だと気兼ねなく訪問でき、家のようなしつらえなので子供も安心して過ごしているというコメントがあった。個室・ユニット型という空間構成は家族の訪問に対する抵抗感を低減させる効果があるともいえる。入居者の誕生日に家族が集まり部屋で誕生日を祝う事例も見られ、施設に入居することによって集団的に行われていた行事が、家族というプライベートな関係の中に戻るという現象も見られた。

また、サテライトに宿泊したことがある家族が2事例あり、宿泊することを想定して布団を持ち込むなどの準備をしている人が2事例あった。宿泊したことのある人について詳しくみると、1人は入居者がターミナル状態となり看取りのため宿泊した事例であり、もう一人は遠方から来ているため宿泊場所として利用している事例である。ターミナル時の宿泊では、一緒のベッドで休むなど家族として思い残すことなく入居者と関わる事が出来ている。遠方の人の場合は、夜に訪問し一泊して昼前

に帰るという宿泊の仕方がなされている。本体においても家族室を利用していたが、より気軽に泊まることができるという点において個室が重要であるといえる。寝静まった後に訪問することもあるが、共に過ごしてきた時間、関係性が共に密な家族のという間柄の場合、長時間、直接的に関わるということだけではなく、一緒に同じ時間を共有するということが重要であると考えられる。

一方、重度の入居者の家族の中には、関係性に変化が見られず家具の持ち込みも少ない事例があった。入居者からの反応がないために家族としてどのように関わっていくべきなのかが見つけにくいというのが、その原因であるといえる。しかし、重度の入居者であっても声をかける。ゆっくりと関わる、車いすに移ってもらうなどの行為により、テレビに反応するようになったという事例もあった。ゆっくりと関わって小さな変化を見つけれられるのは家族しかいないという家族もあり、わずかな変化を体感していく仕掛けが重要であると考えられる。

②共用空間での過ごし方

本体では、居室で過ごしにくいので食堂で過ごしていたという事例が3事例あった。同室者という限られた関係性の中では食事介助を行っていくのが、食堂という集団利用の場所では入居者に対する介助が行いやすかったという側面があったと考えられる。食堂以外にも、併設されている喫茶コーナーを利用している家族が3名おり、複合施設のメリットを活用していた。

サテライトでは、キッチンや食堂を使うという事例は2事例のみであり、5事例は居室以外は全く使わないという回答が得られた。家族の中には、喫茶コーナーなどが無いので一緒に時間をつぶす場所がないというコメントも得られ、小規模化していることのデメリットが現れているといえる。

個室・ユニット型によって、個室という入居者・家族の双方にとっての身の置き所が整備されたが、それを取り巻く共用空間が家族にとって有効に活用されている事例は少なかった。

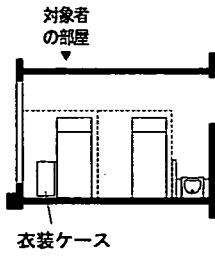
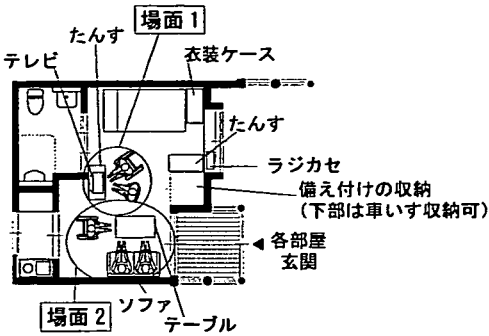
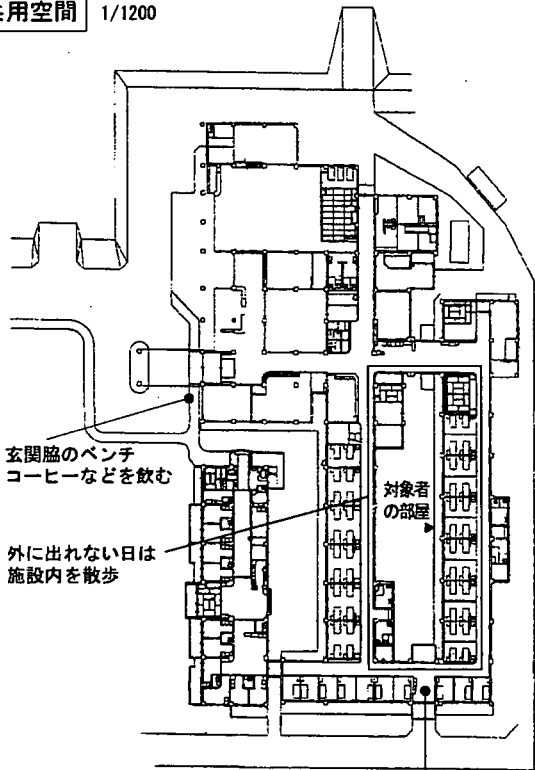
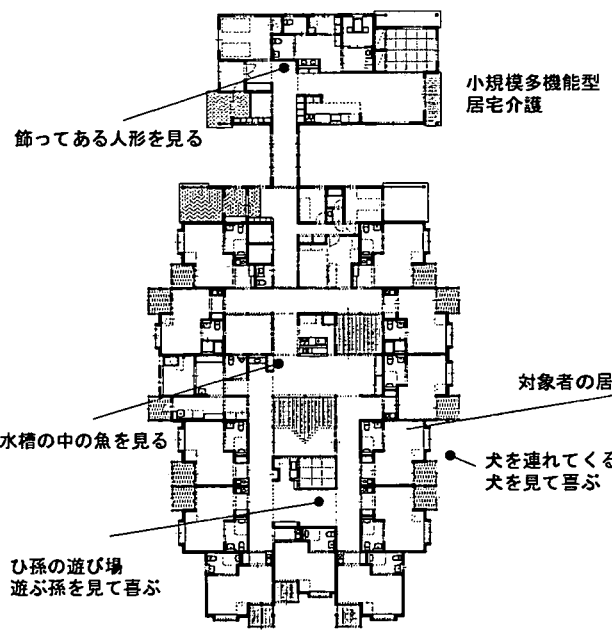
③屋外での過ごし方

双方の本体では、近くに公園が整備されていたり、屋外で過ごす場所が整備されていた。3名の家族が散歩に出かけたことがあるとコメントしており、気分転換という意味において屋外環境は重要であると考えられる。

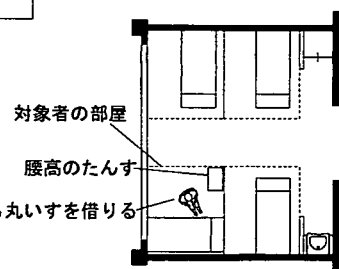
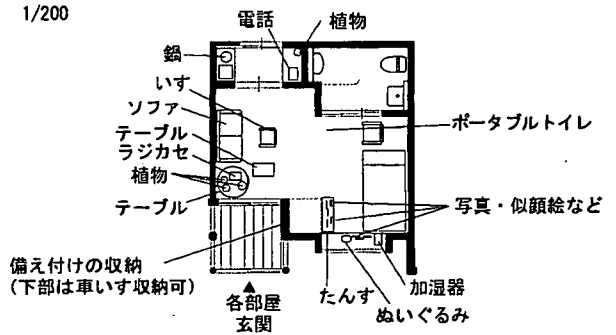
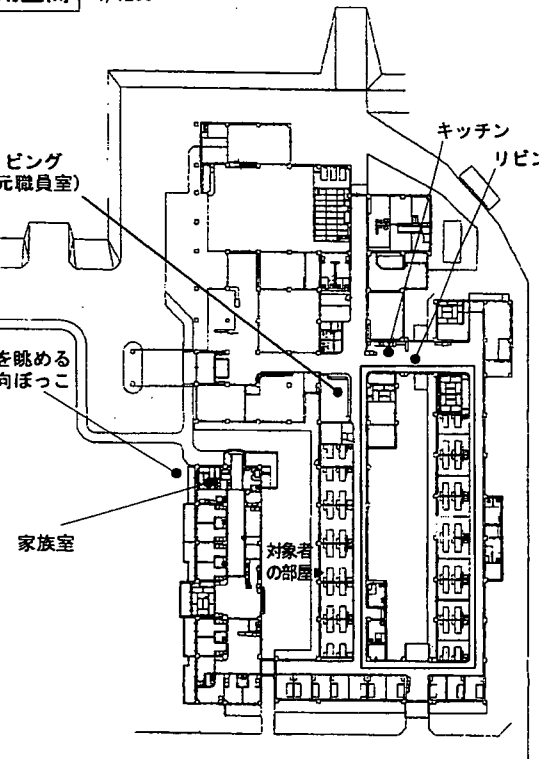
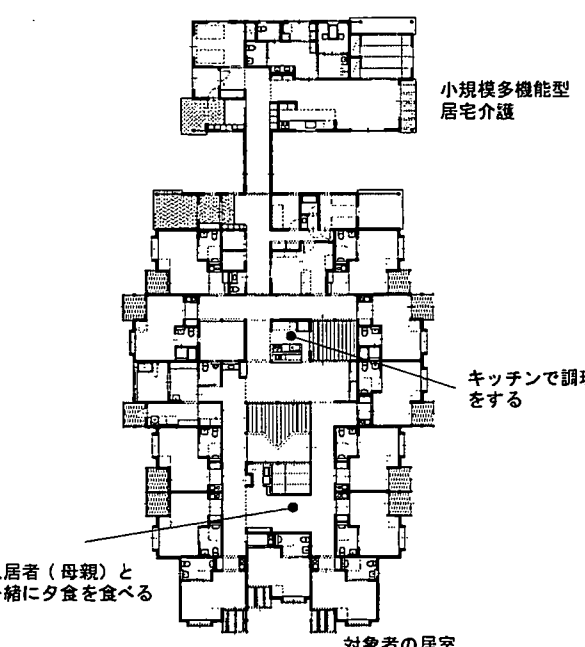
サテライトでは、周りに公園がないので散歩に行く場所が無かったというコメントがある一方で、近くの畑などを見てよく話しをしていた。というコメントも得られている。

本体では、施設を大規模・複合化させることで喫茶コーナーや公園などの多様な空間を作り出すことができるが、小規模なサテライトの場合は居住機能のみとなり、それ以外の要素は地域に依存することになる。周辺に様々な地域資源がある場所を選定することが最も重要であるが、その資源を家族が開拓し使いこなすことが次の課題となる。本調査で対象としたサテライトの周辺にも幾つかの資源があったが、それを十分に使いこなせていない側面があった。本体施設のように家族のためにセットされた環境を使うのではなく、地域の人々が使っているものを使いこなす意識が必要であると考えられる。

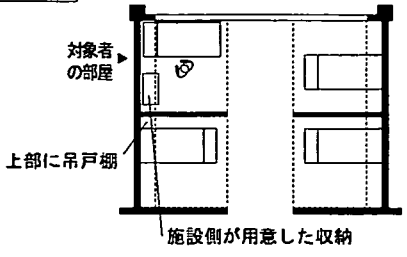
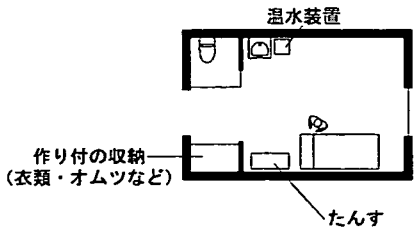
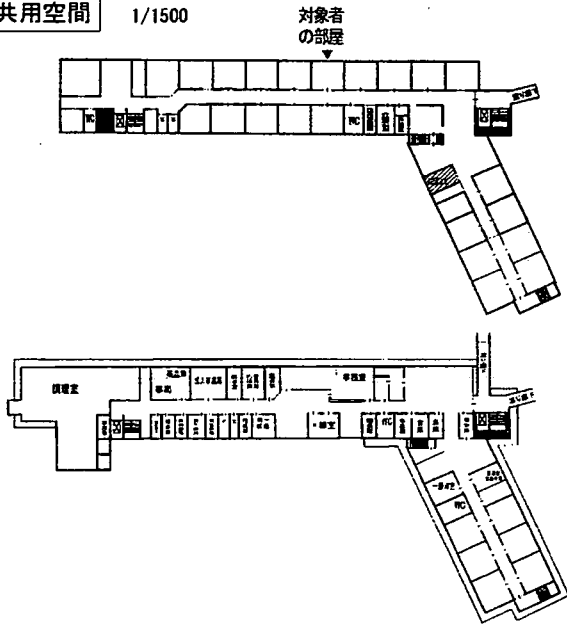
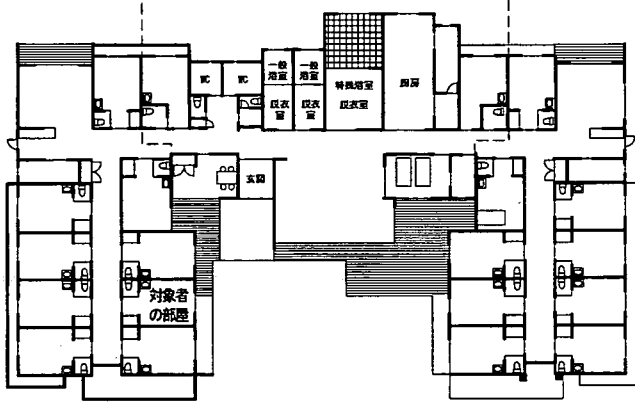
図表 2 - 12 施設での過ごし方 (A03)

<p>A03 居室</p>	<p>1/200</p>	<p>1/200</p>
 <p>対象者の部屋</p> <p>衣装ケース</p> <ul style="list-style-type: none"> 毎週土日のお昼に食事介助をかねて訪問していた。 部屋では、同室者が気になり食事介助が行えなかった。 同室者の人は家族が来ていないようなので部屋の中に居づらかった。 同室者に迷惑をかけてはいけないと思いラジオやテレビも置かなかった。 音のない環境だったので意識がないような無表情な顔をしていた。 部屋には椅子も置いておらず、座ることはなかった。 	 <p>場面1</p> <p>場面2</p> <p>テレビ</p> <p>たんす</p> <p>衣装ケース</p> <p>たんす</p> <p>ラジカセ</p> <p>備え付けの収納 (下部は車いす収納可)</p> <p>各部屋玄関</p> <p>ソファ</p> <p>テーブル</p> <ul style="list-style-type: none"> 毎日お昼に食事介助をかねて訪問していた。 部屋でゆっくりとテレビを見ながら介助助することができた。一緒にテレビを見たり、ラジオを聞いたり、話しかけたりしていた。テレビにも関心を示すようになった。テレビをつけると顔をテレビの方に向けるなど(入居者に)表情が出てきた。(場面1) 個室になったのでひ孫や家族を連れてくるのができた。部屋で遊んでいるひ孫を目で追いつながり、楽しそうにしていたのが印象的だった。相部屋では、思いもつかないことだった。(場面2) 個室でいっしょに寝ることができた。「一緒に寝よう」と母に言ったことがうれしかった。 家では孫の世話で休むことができないので、サテライトのおばあちゃんの部屋で休んでいた。 個室になったことで、食事介助だけでなく排泄介助などプライベートな介助ができるようになった。 母が犬好きだったので、犬を連れて行き、部屋の玄関から出たところに犬をつなぎ母に見せていた。 	
<p>共用空間</p> <p>1/1200</p>  <p>玄関脇のベンチ コーヒーなどを飲む</p> <p>外に出れない日は施設内を散歩</p> <p>対象者の部屋</p> <p>お昼の食事介助</p> <ul style="list-style-type: none"> 食事介助は食堂で行っていた。 家族が来ていなくて寂しい思いをしている人が多いかと思うと、他の入居者からの視線が気になり居づらかった。 	<p>1/600</p>  <p>小規模多機能型 居宅介護</p> <p>節節である人形を見る</p> <p>対象者の居室</p> <p>水槽の中の魚を見る</p> <p>犬を連れてくる 犬を見て喜ぶ</p> <p>ひ孫の遊び場 遊ぶ孫を見て喜ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> 意識がしっかりしている人もいるので、家族が食堂にいるのは居づらい 小規模になったことで職員と親しくなれ、ゆっくりと話をすることも出来た。職員さんの顔と名前を覚えることができたので、安心感が出てきた。 ひ孫が来たときは居間で遊んでいた。それを見て喜んでいた。 外に出れない日は、食堂の横にある水槽や小規模多機能型居宅介護に置いている人形などを見に行っていた。 	
<p>屋外</p> <ul style="list-style-type: none"> いつも外に連れ出して散歩にいっていた。近くにある公園で2人あって話しをしていた。外に出れない日は施設内を散歩していた。 母(入居者)は車いす、私(家族)は玄関脇のベンチに座り、近くの自動販売機で缶コーヒーを買って話をしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 個別の玄関があるのですぐに散歩にいけるようになった。癌の治療で復せてしまい他人に顔を見られたくない姉が母の部屋を訪れる時に、部屋の玄関を使った。プライベートなことが守られていたので訪問できた。 母が犬好きだったので、犬を連れて行き、部屋の玄関から出たところに犬をつなぎ母に見せていた。 周りに公園がないので時間をつぶす場所が無かった。出来たばかりなので周辺の植物も育っておらず気が晴れる散歩コースがなかった。 	

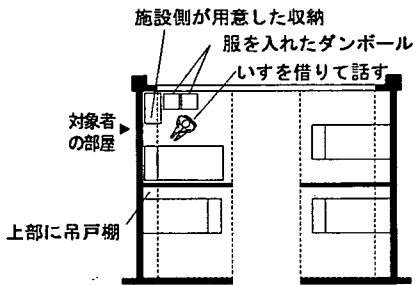
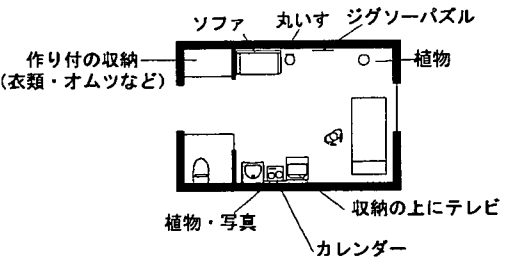
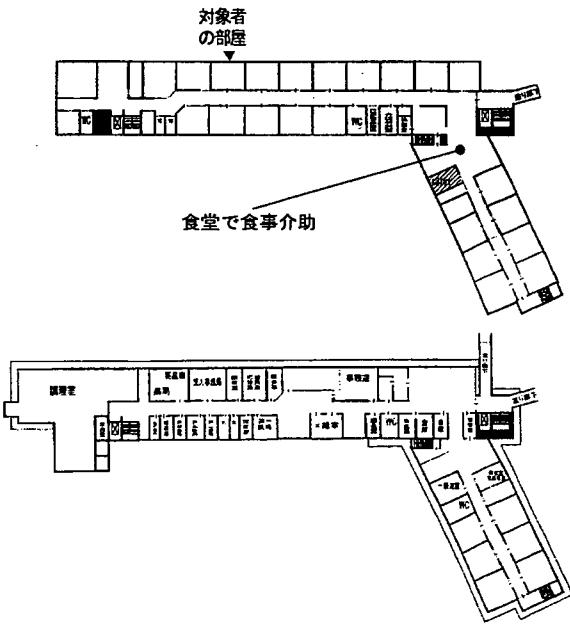
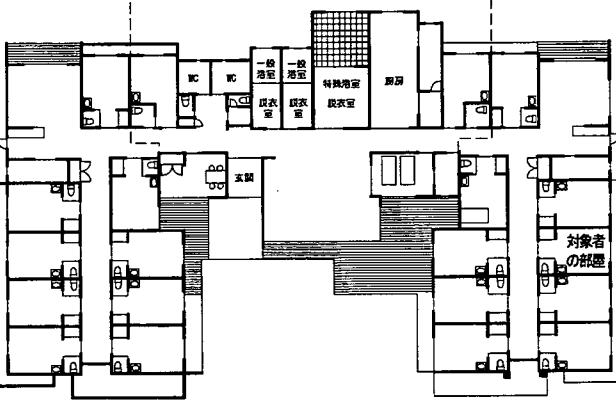
図表 2 - 13 施設での過ごし方 (A09)

<p>A09 1/200 居室</p>  <p>対象者の部屋 腰高のたんす 施設から丸いすを借りる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部屋の中で過ごすことが多かった。 ・部屋の中では、丸いすを借りてきて話しをしたり、お茶を飲んだりしていた。 ・同室者の排泄のニオイがしてくるとご飯やおやつを食べにくかった。 ・他居室だと回りの人に気を使って、一緒にご飯を食べるのも遠慮してしまっていた。 ・家族室があるのを知ってからは家族室を利用していた。 	<p>1/200</p>  <p>電話 植物 鍋 いす ソファ テーブル ラジカセ 植物 テーブル ポータルトイレ 写真・似顔絵など 加湿器 ぬいぐるみ 各部屋玄関 備え付けの収納 (下部は車いす収納可)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サテライトには毎週来る。晩に来て泊まって次の日の昼に帰ることが多い。 ・来たときはまず、買い物したものを冷蔵庫にいれ、菓子を分けて母親が食べやすい状態にする。母を車いすに移し、ソファベッドの用意をする。それから買ってきた夕食を食べて、一人ビールを飲みながら新聞を読んだり、ラジオをきいたりしている。寝る前には携帯の充電もしている。 ・夕食に間に合うときには部屋で一緒に食べている。 ・その後は母と部屋で話しをしている。 ・夜は、12時ぐらいに眠り、2時ぐらいに母のトイレ誘導におきる。職員さんに頼むこともあるし、手伝うこともある。 ・母は歌を歌うことが好きだったので、個室だと気兼ねなく歌える。 ・サテライトでは、母の姉2人と従兄弟がケーキを買ってきてくれ、部屋で一緒に誕生日を祝った。 ・居室のキッチンでピザを焼いたり、煮物を作ったりもする。
<p>共用空間 1/1200</p>  <p>リビング (元職員室) キッチン リビング 庭を眺める日向ぼっこ 家族室 対象者の部屋</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リビングでは食事介助しながら自らの食事も食べていた。 ・キッチンでは洗物の手伝いもしていた。共同間があったので手伝いやすかった。 ・リビング (元職員室) は、ナースコールがうるさく落ち着くことができなかった。 ・家族室があるのを知ってから家族室を利用するようになった (入居半年後に知った)。 ・家族室では布団を敷いて泊まったこともあった。母 (入居者) が骨折したときには、1週間泊まりこみ毎日リハビリをさせた。 ・宿泊時は食材を買ってきて調理もしていた。施設が炊飯器や鍋を用意してくれていたため、それを利用した。 ・家族室は和室だったので、母と一緒に泊まったこともある。 	<p>1/600</p>  <p>小規模多機能型 住宅介護 キッチンで調理をする 入居者 (母親) と一緒に夕食を食べる 対象者の居室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夕食に間に合うときには部屋で一緒に食べている。 ・居室のキッチンでピザを焼いたり、煮物を作ったりもする。リビングのキッチンもよく使っている。レンジを使ったこともある。 ・電気ポットは部屋においてない。お茶はリビングにおいてあるので、それを飲んでいる。 ・お風呂は使わない。近くの温泉に行っている。
<p>屋外</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族室から庭に出ることができたので、大きな木の下で過ごすことも多かった。 ・施設に併設された喫茶店にお茶を飲みに行った。お昼ごはんを食べたりしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・来たときはメインの玄関から入る。居室の玄関は閉まっているので、いったん施設に入ると、居室の玄関を使っている。買い物に行ったり、外でお茶をのんだり、庭でシーツを干したり、洗濯したりもしている。 ・部屋の中から見る紅葉と外で見る紅葉では、感じ方が全然違う。 ・うち玄関があるといちいち挨拶しなくていいし、閉鎖感がなくてよい。

図表 2 - 14 施設での過ごし方 (B01)

<p>B01 居室</p>	<p>1/200</p>  <p>対象者の部屋 上部に吊戸棚 施設側が用意した収納</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入居者（母）は寝たきりで意思疎通が困難なので一方的に話しかけるのみ。 ・滞在時間は10分から15分程度 ・自分（家族）は耳が少し遠いので大声になってしまうが、本体では自分の声を隣の人にうるさいといわれたこともあった。 	<p>1/200</p>  <p>温水装置 作り付の収納（衣類・オムツなど） たんす</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個室だと周りに気を使わなくていいので気楽である。 ・個室は静か過ぎるという人もいるようだが、自分はとくにそうは思わない。 ・滞在時間や頻度は、本体にいるときとあまり代わりがない。10分から15分ぐらい。少しのびて20分ぐらいいるかも。本人（入居者）が来て欲しいとか、もっというて欲しいと言ってくれば、長くいるけど、何も返答がないので、行く機会が少なくなってしまっている。会話が成立すれば週に1回は来ていると思う。 ・食事やおやつ持込はしていない。部屋で母に食事介助をすることもない。本人が食べたいと言ってくれば買ってくるけど、なにも反応がないので・・・ ・部屋が思ったより広かった。もう少し狭くても良いとおもう。 ・外を見てもらおうと、窓際にベッドを寄せたが、母がカーテンを引っ張るので窓際に移動した。
<p>共用空間</p>	<p>1/1500</p>  <p>対象者の部屋</p> <ul style="list-style-type: none"> ・居室の以外の場所はまったく使わなかった。 	<p>1/600</p>  <p>対象者の部屋</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リビングやキッチンを利用したことはない。
<p>屋外</p>	<p>・入所したのが寒い時期だったので散歩することはなかった。</p>	<p>・特になし</p>

図表 2 - 15 施設での過ごし方 (B03)

<p>B03 居室</p>	<p>1/200</p>	<p>1/200</p>
 <ul style="list-style-type: none"> ・こぶし園には3日間しかいなかったが3日も通った。 ・9時ごろに訪問し19時までいた。 ・妻にしか介護を許さなかったので全て介護していた。 ・お昼ごはんはおにぎりを持参し、夫への介助を食堂でした後に部屋で食べていた。 ・4床室は狭かったのがしんどかった。 ・同室者に対して遠慮があった。 ・右マヒ用のトイレが無かったので全介助となり大変であった。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・4日に1回の割合で14時から15時に来ている。コーヒーの時間に話し相手がないと寂しがるからコーヒーの時間に合わせてきている。 ・来たときはまずお菓子の補充をする。 ・部屋では話をしていることがほとんど。花の水を換えたり、夫のひげをそっている。 ・居室にトイレがあることで夫が自由にトイレにいけるのがよい。 ・下の世話などプライベートな介護を気兼ねなくできるのがよい。 ・サテライトの印象は部屋が広くてよい。介護してくれるスタッフの印象がよい。 	
<p>共用空間</p> <p>1/1500</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・食堂で夫の食事介助をしていた 	<p>1/600</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・リビングやキッチンを利用したことはない。 	
<p>屋外</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	<ul style="list-style-type: none"> ・屋外に散歩に行く。散歩に行ったときに二人でいろいろと話しをする。もともと農業をしていたので、畑や稲を見るのが一番やすらぐ。サテライトの植物などもよく見ている。 	

図表 2 - 16 施設での過ごし方 (B04)

<p>B04 居室</p> <p>1/200</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回訪問すると、妻にゼリーを食べさせ、手や顔を拭き目やにをとってあげていた。 ・爪や鼻毛の手入れもその都度おこなっていた。 ・毎回、手足のマッサージを15分ぐらい丁寧に。そうすると、自然に眠ってくれる。 ・後は、部屋に掃除機をかけたり、床ふきをしていた。 ・多床室のときには、他人の排泄介助のニオイに参った。 ・常に他人の気配を感じるためゆっくりと自由に話すこともできなかった。 ・テレビやラジオをつけるのも、同室者の迷惑にならないか気になった。 ・移乗が自分(夫)では出来ないので、車いすに移すことは殆どない。 ・エアーマットなど妻にあった道具は取り入れている。 ・3度の食事のときは車いすに移ってもらえるようお願いしていた。 	<p>1/200</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サテライトへ移ってからでも滞在時間は同じぐらいである。 ・個室だと何でも妻に話しかけることができ、気楽に過ごすことができる。妻へのケア(介護)も自由に行える。 ・個室なので自分の仕事もできる。 ・空気清浄機をセットしたり、温度調整など環境のコントロールが自由に行える。 ・平屋で個室も広い(20㎡)ため使いやすい。 ・部屋の家具は妻が使っていたものをたくさん持ってきている。慣れ親しんだものを持ってくるようにしている。 ・寝具を用意して、いざというときには泊まれる用意をしている。しかし、まだ泊まったことはない。
<p>共用空間</p> <p>1/1500</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部屋以外はあまり使わない。 	<p>1/600</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部屋以外はあまり使わない。
<p>屋外</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	<ul style="list-style-type: none"> ・まちの中でありながら、施設の周りが空いているので気分がいい。